

『血盆経』について

—北京で入手した『血盆経』版木の紹介を中心として—

川 崎 ミチコ

(一) はじめに

血盆経については、すでに多くの先行研究が存在する。その中でも、前川亨「中国における『血盆経』類の諸相—中国・日本の『血盆経』信仰に関する比較研究のために—」^①は先ず、『血盆経』の基本的な研究論文であるミツシエ ル・スワミエ「血盆経の資料的研究」^②を初めとして、中国の『血盆経』に関しては、蕭登福「道教血湖地獄対仏教『血盆経』的影響」^③、日本の『血盆経』に関しては、武見李子「『血盆経』の系譜とその信仰」^④・「日本における血盆経信仰について」^⑤や松岡秀明「我が国における血盆経信仰についての一考察」^⑥、高達奈緒美「血の池地獄の絵相をめぐる覚書—救済者としての如意輪観音の問題を中心に」^⑦・「疑経『血盆経』をめぐる信仰の諸相」^⑧等の論文を紹介し、更に、それらの論文の中から、六つの論点を挙げ、それらを整理していくことにより、『血盆経』の日本における受容形態の研究がかなりの盛況を呈しているということと、中国における『血盆経』の存在形態が充分には明らかではないということがより明確になったとし、中国における『血盆経』の実態の解明が必要不可欠であるとしている。次

いで、「資料の分類と整理」という項目を立て、中国においては『血盆経』に関する多様な文献が存在するので、「取り扱う資料の暫定的な分類と整理」を行う必要があるとしており、中国の『血盆経』類資料を次の三分類にし、解説している。筆者自身もこの三分類を利用しているので、まずは、三分類を前川論文での表記に従って紹介することにする。

A類（狭義の『血盆経』）——仏教經典の『血盆経』。『仏説大藏正教血盆経』とテキストとしての共通性を有し、同一もしくは類似の経題を持つ場合が多い一群の資料を指す。他の文献に組み込まれていてもよいが、当該部分が明確な完結性を持っていること（前後の部分とはっきり区切られていること）が、ここに分類される条件となる。単に『血盆経』という場合には通常このA類のことをいう。

B類（血湖儀典）——道教の血湖儀礼に関する資料の総称。A類との連続性の明らかなものとならないものがあり、内容も科儀書や読誦經典など多様であるが、全てここに一括しておく。ただし分類の便宜上、(一) 文献全体が血湖関係であるものと、(二) 文献の中に部分的に含まれている記述とを区別する。

C類（準血盆経資料）——宝巻などに含まれる・『血盆経』や血湖地獄に関するまとまった記述。やはり分類の便宜上、(一) 文献全体が血湖関係のものと、(二) 文献の一部分が血湖関係のものとを区別する。「まとまった記述」とは、単に「血湖」などの名称が出てくるだけではなく、その地獄の様相、墮地獄の原因などが具体的に描写されているような言及のことをいう。

以上が前川論文の三分類の解説であるが、続いて、

B——(二)、C——(二)については、その文献全体を『血盆経』関係資料とみなすことはできない。しかし血湖地獄関係の記述については『血盆経』に準ずるものとして捉えるのが妥当である。以上のA・B・Cを合わせて広義の

『血盆經』と呼んでもよいが、本論では『血盆經』類と称することにしよう。もとよりこの区分は便宜的なものである。実際には、A類の資料やC類の資料（例えば後掲表ⅠのC—（二）—八・十三）が血湖儀礼の中で用いられる場合もあるし、いずれに所属させるべきか明確でない資料もある（例えば後掲表ⅠのB—（二）—一六の資料は道藏に収録されてはいるが、その内容は仏教的である（スワミエ一九六五・一三三））。なお、日本の『血盆經』の場合には注解の類が存在するのに対し、中国においては『血盆經』類に注解が付けられた形跡がない。これは、中国と日本との『血盆經』の存在形態の顕著な相違点の一つである。

との記述の後、前川論文以前の研究で紹介された資料及び前川論文で紹介した資料全てを、前出の分類基準に従って区分し、「資料名」と「出典・備考」の記された一覧表が約七頁にわたって掲載されている。A類は十一種類、B類（二）は二十種類、B類（二）は十二種類、C類（一）は十九種類、C類（二）は四十三種類の資料が収載されている。

もう一つ馬建華「女性の救済—莆仙目連戲と『血盆經』—」⁹⁾にも注目したいと思う。この論文は、前川論文とは別の面からの考察である。それは、福建省莆仙地域に伝わっている目連戲に関する現地調査と文献考察を踏まえたうえで、莆仙目連戲と血盆經との関連を明らかにしようとして試みた論文である。考察の過程は省略して、その結論として挙げられている四点を紹介する。

（一）目連戲はその発展の過程で『血盆經』の内容を吸収した。

（二）『血盆經』の発展は發生期（北宋前後）、發展期（南宋、元）、最盛期（明、清）という段階を経ている。目連戲はその『血盆經』の發展期に二段階に分けてその内容を吸収した。

（三）北宋期の道教の『血湖經』は女性が血湖獄に墮ちる理由に「産亡」を付け加えた。そして、そののち、南宋、

元の道教の『血湖経』は更に血湖に墮ちる原因を「刀亡」、「縊死」などにまで広げた。

(四) 目連戲の發展にしたがい、『血盆経』を主とした超度儀礼は、目連戲の筋立てをも吸収した。目連戲と『血盆経』はそのそれぞれの發展の過程で、互いに發展を促進しあい、互いに吸収し合ってきた。ただし、目連戲の「戲中超度」の儀礼は『血盆経』に由来するものである。

以上が馬論文の結論であるが、用いられている文献資料は、書物、写真など豊富であり、過去の文献だけに頼るのではなく、現在現実に演じられている目連戲とそれを生活の一部分としている観客との関わりの中にある『血盆経』を認識するには大変有益であった。

さて本稿では、北京市内の古物市場で入手した版本に刻まれている二種類の『血盆経』を紹介することに主眼を置き、勸善書の一つとして清代後半から中華民国、中華人民共和国、文化大革命を経て今日に至るもその姿を留めるだけではなく、人々の心の拠り所として存在すべきものとして、「印施」の対象として存在している『玉歴鈔伝』所収の『血汚池』の記述を見てもとの同時に、巷間流伝の『血盆経』の位置付けを考え、版本の文末にある祈願者の名前を記す部分の存在についての一つの考え方を述べてみたいと思う。

(二) 『血盆経』とは

前川論文において、スワミエ論文の五本の校訂テキストを底本にして行なった校訂本の存在及び其の校訂により導き出された大変興味深く重要な特徴や傾向については、本稿ではその存在を紹介することとどめ、又、スワミエ校訂本を記すことにより、(三)の血盆経との関係を考える上での参考にしたいと思う。

『仏説大藏正教血盆經』

爾時、目連尊者、昔日往到羽州追陽県。見一血盆池地獄。闊八万四千由旬。池中有一百二十件事、鉄梁鉄柱、鉄枷鉄鎖、見南閻浮提許多女人、被頭散髮、長枷扭手、在地獄中受罪。獄卒鬼王、一日三度、將血勒教罪人喫。此時、罪人不甘伏喫、遂被獄主、將鉄棒打作叫声。目連悲哀、問獄主。「不見南閻浮提丈夫之人、受此苦報。只見許多女人、受其苦痛。」獄主答師言。「不干丈夫之事。只是女人產下血露、汚触地神。并穢汚衣裝、將去溪河洗濯、水流汚漫。誤諸善男女、取水煎茶、供養諸聖、致令不淨。天大將軍、罰下名字、附在善惡簿中。候百年、命終之後、受此苦報。」目連悲哀、遂問獄主。「將何報答阿娘產生之恩、出離血盆池地獄。」獄主答師言。「惟要小心教順男女、敬重三宝。更為阿娘持血盆齋三年、仍結血盆勝會、請僧誦此經一藏、滿日懺散便有般若船、載過奈河江岸。看見血盆池中、有五色蓮華出現。罪人歛*喜。心生慚愧、便得超生佛地。」諸大菩薩、及目連尊者、啓告奉勸。南閻浮提衆信男女、早覺修持、大辦前程、莫教失手、万劫難復。佛告說女人血盆經。若有信心書寫受持、令得三世母親、尽得生天、受諸快樂、衣食自然、長命富貴。爾時、天竜八部、人非人等、皆大歛喜、信受奉行、作礼而去。

※歛の字はスワミエ論文では観に作られているが、筆者は意味上歛にした。前川論文も歛に作っている。

以上がスワミエ論文（前掲論文一一二頁）に記載されている『血盆經』である。このスワミエ校訂本作成に用いられた五本の血盆經は、大日本統藏經収載のもの・仏説大藏血盆經（大型折本・乾隆六年〔一七四一〕刊）・慈悲蘭盆目連懺法道場卷（大型折本・康熙十年〔一六七二〕刊）の付録のもの・仏説太陽太陰真經（冊子本・光緒二十一年〔一八九五〕濟南府刊）の付録のもの・H. Dore, *Recherches sur les superstitions en Chine*（〔上海、一九一一年刊〕

第一冊八三頁の第四三図のもの）である。前川論文収載のものは、スワミエ論文とは句読点の異なる部分がある。スワミエ氏の解説によると、B・C・D本には経文の次に「礼念無量宝塔文」と題した一二〇字ほどの願文が付いている。又、C本だけにはその後「願以此功德 普及於一切 我等與衆生 皆共成佛道」の一文がある。E本は、経文の次に「閻羅真言」がある。スワミエ氏は、この仏教の『血盆経』は、恐らく南宋の頃、経師とか唱導師などという死者の追善供養の専門家、つまりそういう民衆仏教家の手に成ったもので、正統仏教の寺院僧侶とはほとんど関係なく、彼等の外で盛んに行われるようになったのであらう、と言っておられる。¹⁰⁾

(三) 北京で入手の血盆経版本の紹介

以前北京の古旧市場で購入した幾種類かの版本の中に、今回紹介する血盆経の版本が含まれていた。丁度当時『玉歴鈔伝』本に収載されている血汚池の図と血汚池の由来の文章を考察しながら、高度な知識階級の人々ではない「一般の人々」であつても理解了解していたと考えることができる、この世の「因」と冥界の「果」、そして如何にすればその「果」の苦しみを取り除くことができるかということについての、人々の関心事を解決するためにも重要な意味を持っていた「勸善書」について考えている時であつたため、この二種類の血盆経の卷末の、「承経受度亡母 門氏 孝男」「以今壇下亡過母 氏拝受」が一体どのような意味を示しているのか、ということに大変興味があつたのであつた（空白部分は、版本に於いても文字の無い部分である）。先ずはその二本を紹介することにする。

「1」『佛説大藏血盆經』（は行替え、□は不明確な文字、（ ）内は推定した文字を示す。句点は筆者）

佛説大藏血盆經 爾時目連尊者。昔日往到羽州追陽縣。見一血盆地獄。濶*八萬四千由旬。池中有二百二十件事。鉄樑*／鉄柱鉄枷鉄鎖。見南閻浮提許多女人。披頭散髮。長枷杻手。在／地獄中受罪。獄卒鬼王。一日三度。將血勒叫*罪人吃*。此時罪人／不甘服*吃*。遂被獄主。將鉄棍*打作叫声。目連悲哀。遂問獄主。不見南閻浮提丈夫之人。受此苦報。只見許多女人。受此*苦痛。獄／主答師言。不干丈夫之事。只見女人產下血露。汚觸地神。並汚*／穢*衣裳。將去溪河洗濯。水流汚漫。□（誤）*□（諸）*善男信*女。取水煎茶。□（供）*／奉*諸 聖。致令不淨。天大將軍。割下名字。附在善惡□（簿）中。候*百／年。命終之後。受此苦報。目連悲哀。遂問獄主。將何報答阿娘生／產之恩。出離血盆地獄。獄主答師言。惟要小心孝*順男女。敬／重三寶。更爲呵*娘持血盆齋三年。仍結血盆勝會。人*子*自*誦此／經一藏。滿日懺散便有般若般*。載過奈河江岸。看見血盆地中。／有五色蓮花出現。罪人歛*喜。心生慙愧。便得超生佛地。諸大菩／薩及目連尊者。啓教奉勸。南閻浮提善*男*信*女。早□（覺）*修行*。大辦／前程。莫教失手。萬劫難復。佛説*女人血盆經。若有信心書寫受／持誦*説*。令得三世母親。盡得生天。受諸快樂。衣食自然。長命富／貴。爾時。天龍八部人非人等。皆大歡喜。信受奉行。作礼而退／承經受度亡母 門 氏 孝男

*印の付された文字は、スワミエ校訂本とは異なる文字、もしくはスワミエ校訂本には無い文字である。

この「血盆經」は、目連尊者が、血盆地獄における女人達に加えられている甚だしい責苦を見たところから始まる。目連尊者はその状況に悲哀の念を抱き、獄主に対して「苦報を受けているのは、たくさんの女人だけではないか」と問い、その答として、獄主は「女人のお産の時の血露が地神を汚し、汚穢の衣装を溪河で洗濯したならば、

川の水を汚してしまふ。(それを知らずに) 善男信女がその水を汲み、お茶を煎れ、諸聖にお供えしたならば、不浄をなしたこととなり、その結果として(その原因を作っている) 女人は、臨終の後(血盆地地獄で) この苦報を受けるのだ」という。目連は更に悲哀の思いを重ね、獄主に「母親に対して、産んでいただいたご恩に報い、母親を血盆地地獄から救いだすにはどのような方法があるのか」と尋ねる。すると獄主は、「孝順の男女が三宝を厚く敬い、更に母親のために血盆齋を三年の間行い、血盆勝会も行い、(僧侶に依頼するのではなく) 自分自身でこの「血盆経」を読誦しなさい。満期になったならば、血盆地の中に五色の蓮の花が出現し、この血盆地地獄の中にいる人々は歡喜し、心には慙愧を生じ、仏地に生まれ変わることができるのです。この世にいる善男信女は、早いうちに今示したことを行うべきなのです。(慎重にして) 手元を狂わせることのないようにしなさい。永久に回復することは難しいのですから。「仏説女人血盆経」を、もし信心して書写し、受持し、読誦したならば、過去三代にわたる母親(母・祖母・曾祖母)をすべて天に生まれ変わらせ、諸々の快樂を受けさせることができ、衣食も十分で、長命富貴な状態にさせることができますのです。」と答えるのであった。

以上がこの「血盆経」の大まかな内容である。巻末の「承経受度亡母 門 氏 孝男」は、「仏説大藏血盆経を承け頂き、□家に嫁いだ□姓の亡き母を濟度せん。あなたの息子より」ということである。ここで、「□門□氏」について説明すると、この場合の「門」は家柄を言うのであり、例えば「王門陳氏」は「王の家に嫁いだ陳姓の婦人」の意となる。また、「孝男」には、「1. 孝行息子 2. 服喪中の男子 3. 亡くなった父母に対する男子の自称」等の意味があるが、ここでは、2もしくは3の意味を取りたいと考える。

前後したが、此処で特に注目したい点は、「人子自誦此経一藏」の「人子自」である。スワミエ校訂本では、「請僧転誦此経一藏」となっているが、此処では「僧侶に頼んでこの血盆経を転誦してもらう」のではなく、「自分自身

でこの血盆經を誦經する」ということであり、非常に民衆的、自発的対応をしているということが分かる。極端な言い方をすれば、この血盆經が宗教的な意味合いで位置付けられているのではなく、日常的、慣習的な意味合いで人々の生活中に定着していたということができないかと思うのである。

〔2〕『太上血湖救苦拔罪妙經』

（／は行替えを示す・句点は筆者）

太上血湖救苦拔罪妙經／爾時 元始天尊。在上陽宮內八景天中大會／說法之時。有實相真人越班而出上白天尊言。／昔奉道旨徑往下方巡遊九獄。復至羽州追陽／縣曠野之中。見一硤石在山中內有血池血湖／血盆血海等。諸大地獄各濶四萬八千圍遶。其／地獄中有銅梁銅柱鐵枷鐵鎖鐵網鐵圍。萬仞／峰山。見南閻浮隄女人無限沙數長枷杻手。在／血湖中。受大苦惱。獄卒鬼王一日三度。驅勒罪／人飲食汚血。彼時罪人不堪伏喫。遂被獄卒拷／打。哀聲號徹萬劫不赦。何由出離。臣等願乞／慈悲哀憐所懇請說。爾時。天尊言曰。善哉／善哉。實相真人能救此業。汝當諦聽時為宣說／彼時閻浮女人生產之時血露。汚觸地神。將血／汚衣服溪河洗濯。水流汚漫。誤諸善人取水。煎／茶供饌諸聖。致 三元拷較上奏天延敕下。／酈都血湖受罪。從今已往世間孝順男女與母。／齋戒圓滿。表懺信心。書寫受念持誦。即刻玉符／寶籙。三世父母俱得上生 天堂。受諸快樂。若／母親存世。能為修持度脫血湖。延生保命。衣食／自然。汝宜流傳於世。奉勸修持。即時存亡開泰／莫教失乎。爾時。實相真人及諸天人皆大懽／喜。信受奉行。作禮而退。以今壇下亡過／母□氏拜受太上血湖救苦拔罪妙經終

以上が『太上血湖救苦拔罪妙經』の全文であるが、その内容、用いられている文字は、かなり共通しており、『仏

説大蔵血盆經』に登場していた目連尊者と獄主との問答が、ここでは元始天尊と實相真人との對話となっている。經典名稱は道教經典そのものであるが、この版木で刷られたものを手にした人々にとっては、先の『仏説大蔵血盆經』同様、宗教的認識は低く、「疑偽經典」の特徴の一つである、「より解り易く」「より日常的に」「より人々の生活に浸透する」教えとして存在していたものであろう。

卷末の「以今壇下亡過母□氏拝受」は、「今を以て壇下（お墓の中）の亡過の母□氏拝受す」、つまり、「今、お墓の中に入っている亡き母□氏がこの太上血湖救苦拔罪妙經を頂戴致しました」という意味なのであろうか。この刷りものを手にしている者とここに記されている亡過の母との関係はどのように考えればよいのか。亡き母の供養のためにこの經典の刷りものを入手している筈なので、亡過の母本人がこの經典を拝受するという意味を十分に理解することができないでいる。

（四）『玉歷鈔伝』本に記載されている「血汚池」について

（I）『玉歷鈔伝』本中の「血汚池」の記載について

勸善書の一つである『玉歷鈔伝』¹¹本には、図像を描いた頁のあるものが多いが、その中に「血汚池」を描いたものがある。そこで、ここでは、現行流布の『玉歷鈔伝』と 中華民国まで施印流布していた『玉歷鈔伝』、それぞれに描かれている「血汚池」及び記載されている「血汚池」についての記事を紹介することにする。

筆者所有の現行本『玉歷鈔伝』本は、十四種類四十一本あるが、それらは、

（a）「血汚池」が像図頁「第四殿五官王」と同画面に描かれているもの

(b) 図像頁のないもの、つまり「血汚池」の図のないもの

(c) 第四殿の解説文の最初の頁に九華山化城寺にある十殿十王図の写真的該当殿数の写真のあるもの

(d) 「辯明世間誤傳的部份」にある「血汚池的因縁」の記載のあるもの

(e) (a) から (d) までの組み合わせ、もしくは (a) から (d) のいずれにも該当しないもののいずれかに分類することができる。

(a) に該当する図は同一同様のものであった。但し、「一〇」『玉歴寶鈔』所収の「四殿五官王」の図像は (a) とは異なり、九華山化城寺の写真と同一のように思われる (印刷状態が悪く明確な判断が困難である)。

(b) に該当するのは、「一三・一六・二三・二四」の『白話玉曆』、「一九・二〇・二二・二五・三〇」の『玉歴寶鈔』である。

(c) に該当するのは、「三」の『玉歴寶鈔』、「四」の『玉曆寶鈔』、「七・三一・三九・四〇・四一」の『玉曆寶鈔 附現代因果報応録』であり、写真の上には「四殿五官管血湖 血汚池内男者無 雖曰男子無此罪 究竟造

罪兩相符」の七言四句あり。

(d) に該当するものは、

[1] 血汚池の因縁：血汚池設在本殿後面的左側。世間の人、誤聽道姑胡説、以為、凡是婦人生産、就是有罪；死後即發入血汚池受苦。這真是大錯特！婦女生産、是天經地義的事。即使難産而突然死亡；絕不会因她的屍鬼汚穢、而發入此池。

發入此池的罪過有：(一) 生産後未超過二十天、就接近井・灶・洗滌衣服。將血汚之衣、曬晾在高處、汚穢

了神明。此罪應歸一家之長的三分；婦人則有七分之罪。(二)無論男女、凡是不顧忌地在神之前、或是佛之後、苟行房事。或者不忌諱日辰、例如：五月十四日・十五；八月初三・十三；十月初十。這五天、男女犯禁行房。以上二種情形之人、於神明降下惡疾、突然死亡後、並在陰間遍受諸地獄的苦刑。此外、還得永遠浸在血污池中、不得出頭。(三)無論男女、在世時喜好宰殺生靈・動物。汚血濺染了廚灶、神佛的廟堂(家設佛堂而殺生)；經典・書籍・文章・有字的紙；以及祭祀的器皿。此種人在受過各種惡刑、地獄諸苦後、再解到血污池、浸入其中、不能輕易地出頭。

如果陽世的親屬、能□有人立下大願、代爲戒殺；買生靈放生。放生的數目足□之時、再茹素、供養神・佛；並且札拜曾經遭血污穢的經懺、方能超脫他在地獄的苦刑。

〔2〕血污池、置設本殿後方之左、陽世誤信道姑所說、皆因婦人生產有罪、此污以為婦人生產死後入此污池、荒謬至也。凡坤道生育、係屬宥有之事。即使難產而暴亡者、均不罪及屍鬼污穢、發入此地。設此污池、即針對男女曾在陽世、不顧神前仙後、不忌日辰、如五月十四・十五、八月初三・十三、十月初十、此五日。男女犯禁交媾、除神降惡疾暴亡、受過諸獄苦後、永浸其池、不得出頭(頭に作るもの多し)。及男女好宰殺、血濺廚竈・神仏廟堂・經典書章字紙一切及祭祀器皿之上者、受過他惡諸獄苦後、解到浸入上(此に作るもの多し)地、能有出頭；陽世終不得輕易親屬立願、代為戒殺買命放生、數足之日、齋供仏神、札拜血污經懺、方可超脫其苦。

〔3〕血污池位在酆都大帝寶殿的左側、過去也有錯誤的伝説、以為是婦女因生產有罪、此污死後入此污池、其實並非如此、婦人成育、傳宗接代、延續民族的命脈、實理所必然的、即算因為難產而遭遇死亡、也不應該再在地府受苦、被押入血污池受苦的鬼魂、是婦女生產未滿二十日、將本身穿著(着に作るもの多し)過(後に作る

もの多し)の内褲、洗後灑在光亮高処或別人過路的上面、以及世人生時好宰殺家禽、過度殘害生靈、毒本性惡、罪孽深重、或者在生時、看見他人有苦難、不願稍予協助、甚至忘恩負義、恩將仇報、都有被罰浸入此池受苦的可能、一切以他生時犯罪的程度而決定的。(『白話玉歷』)

〔4〕血汚池。置設殿後之左。陽世誤聞道姑所說。皆因婦人生產有罪。此死後入此汚池。謬之甚矣。凡坤道生育。係粟王必有之事。即難產而暴亡者。均不罪其屍鬼污穢。發入此池。如有生產未過二十日。輒即身近井竈。洗滌衣襖。曬亮高処者。其罪必婦家長三分。本婦罪坐七分。設此汚濁池。無論男女。凡在陽世不顧神前仙後。不忌日辰。如五月十四十五。八月初三十三。十月初十。此四日。男婦犯禁交媾。除神降惡疾暴亡。受過諸獄苦後。永浸其池。不得出頭。及男婦而好宰殺。血濺厨竈神仙廟堂經典書章字紙一切。祭祀器皿之上者。受過別惡諸獄苦後。解到浸入此池。亦不得輕易出頭。陽世能。代有親屬立願為戒殺買命放生。數足之日。齋供鬼神。札拜血汚經懺。方可超脫其苦。

〔5〕血汚池設在本殿后面的左側。世間的人、誤听巫婆道姑神漢胡說、以為婦女生孩子時血流污垢、就是有罪、死后就要進入血汚池受苦。這真是大錯特錯！婦女生產、是天經地義的事、即使難產而突然死亡、也絕不會因她屍鬼污穢、而進入血汚池。

應該發入此池的罪過有：(一)產下孩子后未超過二十天、就接近水井・灶、洗滌衣服、將被血污染的衣襖等物、晒晾在高処、污穢了神明。此罪必婦一家之長的有三分、婦人則七分之罪。(二)無論男女、凡是有顧忌地在仙像・神像附近、苟行男女交合行房事者；或者不忌諱日辰、例如：在農曆的五月十四・十五日、八月初三・十三日、十月初十日這五天犯禁行房者。以上二種情形的人、神明會降下惡疾使他患上惡病、死亡后、在陽間遍受各地獄的苦刑。此外、還要永遠浸在血汚池中、難得出頭。(三)無論男女、在人世間時喜歡宰殺

生霊・動物、使汚血濺染了厨灶或神仏の廟堂（家設佛堂而殺生）、經典・書籍・文章・有字的紙以及祭祀の器皿。這種人在受過各種惡刑及地獄諸苦后、再押解到血汚池、浸入其中、不能輕易地出來。

如果陰世的親屬、能□有人立下大願、代他戒殺、買動物放生。等放生的數目達到一定數量時、再吃素、供養神・仏、并且懺悔、札拜曾經遭血汚穢的經典、才能使他超脫在地獄的苦刑。〔玉歷寶鈔〕弘法寺印行・二〇

〇五・九・九、南京靈谷寺にて入手、圖像部分無し）

（Ⅱ）清（嘉慶・宣統）・中華民國に重刊・刊行された木版本及び石印本の『玉歷鈔伝警世』・『呂祖師降諭遵信玉歷鈔伝闔王經』・『玉歷至宝鈔』・『玉歷至宝鈔勸世』・『繪図玉歷宝鈔勸世文』中の「血汚池」の記載について

此処に該当する筆者所有の『玉歷鈔伝』本は大別して三種類十本あるが、（Ⅰ）とは異なり、すべてに像図が附されておき、「血汚池」図もすべてに存在する。また、血汚池に関する文章も記載されている。特筆すべきことの一つは、石印本の『玉歷至宝鈔勸世』所収の「血汚池」図が（Ⅰ）の「血汚池」図の元本ではないかと思われるほどそれと酷似している。もう一つは、（Ⅰ）の「血汚池」図には図中に説明的文字はないのであるが、『玉歷至宝鈔』及び『呂祖師降諭遵信玉歷鈔伝闔王經』中の「血汚池」図にある説明的文字のことである。前者二本には、「好色・陰險・貪酷・窩娼・游嬉・局賭・浮孽・咒詛」とあり、後者には、「葷擲・好色・貪財・鴉片・拐□・惡賭・好謔・咒詛」とある。この後者の「鴉片」の記述は如何にも時代を反映したものと言える。同時にこのような一般庶民向けの勸善書に記さなければならないほど、鴉片害毒が蔓延していたということが分かるということでもある。又、血汚池の上に架かる橋の上には、「不孝翁姑。不敬尊長。不顧神前佛後。不忌日辰。男婦犯禁交媾者。永浸此池。」の文字（句点

は筆者）がある。此の文章と同内容の記述が「血汚池」の解説文（玉歷鈔伝縁起）の中に存在する。

次に、「血汚池」についての文章を紹介することにする。これは、（I）にあげてあるものとは、些か文字の上で異なる部分があるが、その言わんとするところは同様である。

〔1〕血汚池。置設殿後之左。陽世誤聞僧尼所説。皆因婦人生産有罪。死後入此汚池。謬之甚矣。凡坤道生育。係

属応得之事。即難産而暴亡者。均不罪其屍鬼汚穢。発入此池。如（如若に作るもの有り）生産未過二十日。輒即身近井竈。滌洗衣襖晒（曬に作る者有り）亮高處者。其罪忤家長三分。本婦罪坐七分。設此汚池。無論男女凡在陽世。不顧神前佛後不忌日辰如五月十四十五日夜。八月初三。十月初十。此四日。男婦犯禁交媾。除神降惡疾暴亡。受過諸獄苦後。永浸此池不得出頭。及男婦而好宰殺。血濺廚竈神佛廟堂。經典書章字紙。一切祭祀器皿之上者。受過別惡諸獄苦後。解到浸入此池。亦不得輕易出頭。陽世能有親属立願。礼数足之日。齋供神佛拜血汚経懺。方可超脱其苦願代為戒殺。買命放生。（木版本：『玉歷鈔伝警世』）

〔2〕血汚池置設殿後之左。陽世誤聞僧尼所説皆夫人生産有罪。死後入此汚池。謬之極矣。凡坤道生育。応有之事。凡難産而暴亡者。均不罪其屍鬼汚穢。発入此池。如生産未過二十日。即身近井竈滌洗衣襖曬亮高處者。其罪婦家長三分。本婦罪坐七分。設此汚池無論男女在陽世不顧神前佛後。不忌日辰。如五月十四十五。八月初三。十月初十。此四日。男婦犯禁交媾。除神降惡疾暴亡。受苦後。永浸此池。及男婦好宰殺血濺廚竈神佛廟堂。經典書章。一切祭祀器皿之上者。解到浸入此池。不得出頭。陽世能有親属立願。代為戒殺。買放生。数足之日齋供神佛。礼拜血汚経懺。方可超脱其苦也。（木版本：『玉歷鈔伝警世』）

〔3〕血汚池。在本殿後之左。世人誤聽僧尼之説。以為婦人生産有難。死後入此汚池。謬之甚矣。凡坤道生育。係

屬應得之事。即難產暴亡。均不罪其污穢發入此池。若生產未過二十日。輒身近井竈。洗滌穢衣。高處掛晒者。罪婦家長三分。本婦罪坐七分。必交汚池浴血。又陽世神前佛後。不忌日辰。如五月十四。十五日夜。八月初三。十月初十等日。男婦犯禁交媾。除神降惡疾暴亡。遍受諸獄苦滿外。永浸此池。又男女好宰殺。血濺廚竈廟堂。及經書字紙祭器之上者。亦令遍受諸獄苦滿外。永浸此池。如陽世親屬立願。代為戒殺放生。數足日。齋供神佛。札拜血污經懺。方可超脫。(石印本：『石印玉歷至寶鈔』·『重刻石印玉歷至寶鈔』)

[4] 血汚池。置設殿後之左。陽世誤聞僧尼所說。皆因婦人生產有罪。此汚死後入此汚池。謬之甚矣。凡坤道生育。係屬心有之事。即難產而暴亡者。均不罪其屍鬼污穢。發入此池。如有生產未過二十日。輒即身近井竈。洗滌衣襖。曬亮高處者。其罪應婦家長三分。本婦罪坐七分。設此汚池。無論男女。凡在陽世不顧神前佛後。不忌日辰。如五月十四十五。八月初十三。十月初十。此四日。男婦而犯禁交媾。除神降惡疾暴亡。受過諸獄苦後。永浸其池。不得出頭。及男婦而好宰殺。血濺廚竈神佛廟堂經典書章字紙一切祭祀器皿之上者。受過別惡諸獄苦後。解到浸入此池。亦不得輕易出頭。陽世能有親屬立願。代為戒殺買命放生。數足之日。齋供神佛。札拜血污經懺。方可超脫其苦。(石印本：『玉歷至寶鈔勸世』)

[5] (酆都大帝曰) 血汚池。置設殿後之左。陽世誤聞僧尼所說。皆因婦人生產有罪。死後入此汚池。謬之甚矣。凡坤道生育。係屬心得之事。即難產而暴亡者。均不罪其屍鬼污穢。發入此池。如若生產未過二十日。輒即身近井竈。洗滌衣襖。曬晾高處者。其罪應婦家長三分。本婦坐罪七分。設此汚池。無論男女。凡在世陽。不顧神前佛後。不忌辰日。如五月十四十五日夜。八月初三十月初十。此四日。男女禁犯交媾。除神降惡疾暴亡。受過諸獄苦後。永浸此池。不得出頭。及男婦而好宰殺。血濺廚竈神佛廟堂。經典書章字紙。一切祭祀器皿之上者。受過別惡諸獄苦後。解到浸入此池。亦不得輕易出頭。陽世能有親屬立願。代為戒殺買命放生。數足之

日。齋供神佛。礼拝血汚経懺。方可超脱其苦。（『玉歷至宝鈔勸世文』『増繪全図玉歷宝鈔勸世文』）

〔6〕（鄮都大帝曰）血汚池。置設殿後之左。陽世誤聞僧尼所説。皆因婦人生産有罪。死後入此汚池。謬之甚矣。凡坤道生育。係属応得之事。即難産而暴亡者。均不罪其屍鬼汚穢。發入此池。如若生産未過二十日。輒即身近井竈。滌洗衣祆。曬亮高处者。其罪応帰家長三分。本婦罪坐七分。設此汚池。無論男女。凡在陽世不顧神前佛後。不忌日辰。如五月十四十五日夜。八月初三。十月初十。此四日男婦犯禁交媾。除神降惡疾暴亡。受過諸獄苦後。永浸此地。不得出頭。及男婦而好宰殺。血濺厨竈神佛廟堂。經典書章字紙。一切祭祀器皿之上者。受過別惡諸獄苦後。解到浸入此池。亦不得輕易出頭。陽世能有親属立願。代為戒殺。買命放生。数足日。齋供神佛。礼拝血汚経懺。方可超脱其苦。（繪図玉歷鈔伝）

〔7〕（鄮都大帝曰）血汚池。置設殿後之左。陽世誤聞僧尼所説。皆因婦人生産有罪。死後入此汚池。謬之甚矣。凡坤道生育。係属応有之事。即難産自暴亡者。均不罪其屍鬼汚穢。發入此池。如有生産未過二十日。輒即身近井竈。洗滌衣襖。曬亮高处者。其罪応帰家長三分。本婦罪坐七分。設此汚池。無論男女。凡在陽世不顧神前佛後。不忌日辰。如五月十四十五。八月初三十三。十月初十。此四日^マ。男婦犯禁交媾。除神降惡疾暴亡。受過諸獄苦後。永浸其池。不得出頭。及男婦而好宰殺。血濺厨竈神佛廟堂經典書章字紙一切。祭祀器皿之上者。受過別惡諸獄苦後。解到浸入此池。亦不得輕易出頭。陽世能有親属立願。代為戒殺買命放生。数足之日。齋供神佛。礼拝血汚経懺。方可超脱其苦。（『玉歷至宝鈔』）

以上が『玉歷鈔伝』本に記載されている「血汚池」についての記述である。底本を定めて校勘をせずに、十二点を羅列したが、それは、この勸善書の文章の異同を視覚的に認識したいと思ったからである。例えば、「不忌日辰。如

五月十四・十五、八月初三・十三、十月初十、此五日」、「不忌日辰。如五月十四十五。八月初三十三。十月初十。此四日。」（この記述は計算が合わない。）、「不忌日辰。如五月十四十五。八月初三。十月初十。此四日。」「不忌日辰。如五月十四十五夜。八月初三。十月初十。此四日。」のように、四日なのか、五日なのかどちらなのかと考える場合でも、八月初三・十三、そして、十月初十と記すとき十三とせずに誤って十月と記したのではないかなどと考えることができる。

（五） おわりに

既に資料として挙げておいた『玉歷鈔伝』本所収の「血汚池」についての記述の中で、「如陽世親属立願、代為戒殺買命放生、数足之日、齋供佛神、礼拝血汚経懺、方可超脱其苦。」「如果陽世的親属、能□有人立下大願、代他戒殺買動物放生。等放生的数目達到一定數量時、再吃素、供養神・仏、并且懺悔、礼拝曾經遭血汚穢的經典、才能使他超脱在地獄的苦刑。」などとあるように、死亡してしまった者が、地獄の血汚池で苦刑にあえいでいる状態から救済するためには、ここに挙げられているような「供養」をしなくてはならない、ということが記されている。

同様に、本稿で紹介したこの二枚の版本に刻まれている「血盆経」は、「母親に対しての「孝」という觀念の発露」を目に見える形にしたものと考えることができないのではないかと思うのである。もう少し穿った見方をするならば、拡大解釈的勸善書と考えることができるのではないだろうか。「この版本を刷り上げた紙」を入手して、紙の上にある空格の部分に己の母親のなまえを記し、母親の地獄の血汚池からの救済と楽土への往生を願ったものとして流通していたとは考えられないであろうか。

「血盆経の信仰」については、スワミエ論文、前川論文や馬論文を参照していただきたい。

本稿は二枚の版木に刻まれている「血盆経」及び「血湖救苦拔罪妙経」を紹介することを目的にしたのであるが、関連する「玉歴鈔伝」本に記載されているところの血汚池についての記事もふくめて詳細な検討結果を載せることができず、中途半端なこととなっている。願わくば、紹介した資料の中に一つでもお読みいただいた方に役立つものがあればと思っている。

注

- (1) 『東洋文化研究所紀要』第一四二冊・東京大学東洋文化研究所・二〇〇三
- (2) 吉岡義豊・ミッシェル・スワミエ編修『道教研究』第一冊・昭森社・一九六五
- (3) 『道教与仏教』・台湾学生書局・一九九五
- (4) 『仏教民俗研究』三・一九七六
- (5) 『日本仏教』四一・一九七七
- (6) 『東京大学宗教学年報』六・一九八八
- (7) 『絵解き研究』六・一九八八
- (8) 『国文学解釈と鑑賞』五五・八・一九九〇
- (9) 野村伸一編著『東アジアの祭祀伝承と女性救済―目連救母と芸能の諸相』風響社・二〇〇七・頁三五三―四〇七

(10) スワミエ論文頁一二七—一三七、頁一四六—一四七

(11) 川崎ミチコ『玉歴鈔伝』について」平成一六年度〜平成一八年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書・二〇〇七）所収の研究ノート参照。

参考

(1) 筆者所有の「血盆經」類という大きなグループに包括される「經典」には、

『報母血盆經』（冊子本・民国乙丑仲夏刊・北京墨華齋印經処印；ほかの版本のものもあり）

『血湖真經』（木版経折本・中華民国三年刊刻・四川成都二仙菴藏板；『血湖赦罪妙經』十二行があるが、恐らく刷りあがったものを張り付ける時に紛れ込んだのであろう。筆者は成都二仙菴藏板を成都にある青羊宮の経処部で購入したのであるが、其処は道士の人たちが版木を刷り、刷りあがったものを乾かし、それをつなぎ合わせて経折本を作成するわけであり、同時に幾種類かの物を扱っているために起こったことであらう。ついで『太上洞玄靈宝濟度血湖真經』が収載されている）

『血湖法懺』（木版経折本・民国壬子元年重刊・成都二仙菴藏板）

『血湖妙經』（木版経折本・大漢中華民国壬子元年刊刻・四川成都二仙菴藏板・この經典の正式名称は『血湖赦罪妙經』である）

『蘭盆血盆寶懺』（簡体字使用・全九十九頁・B5判・二〇〇四年九月成都昭覺寺にて入手）

この他にも、血汚池図や血汚池に関する記事の収載されている『玉歴鈔伝』本類が多く存在する。

(2) 本東洋大学所蔵の哲学堂文庫「る三六」『仏説孟蘭盆經』（外題：『孟蘭盆經私記疏』）に収載されている「敬白血盆縁起之事」及び「仏説大蔵正教血盆經」は、日本における「血盆經」信仰を知る上で重要な資料となっている。

飯島奈海「東洋大学哲学堂文庫蔵『孟蘭盆経私記疏』解題・翻刻―血盆経信仰の一資料として―」(『三田國文』第二十七号・一九九八年)に詳細な資料紹介が掲載されている。

(3) 本文中にとりあげたこの本の木版資料を次頁に載せておいた。

『血盆経』について ―北京で入手した『血盆経』版木の紹介を中心として―

佛說大藏血盆經 爾時目連身有青目往到刑州追隨病見
 一血盆池地獄入高四千由旬池中有二百二十件事鉄條
 鉄柱鉄枷鉄鎖見南閻浮提許多女人披頭散髮長枷扭手在
 地獄中受罪獄卒見王一日三度將血動叫罪人吃此時罪人
 不甘服吃遂破獄至刑鉄柱打作碎声目連聲哀遂開獄至不
 見南閻浮提丈夫之人受此苦報只見許多女人受此苦痛獄
 至若師官不于无天之事只見女人墮下血盆汚濁地神主汚
 穢衣袋縛去流河泥濁水流汚漫滿善男信女取水煮茶使
 奉請 聖政令不淨天大罪獄下名字附在毒惡籍中候百
 年命終之後受此苦報目連見此獄主將前報答阿娘生
 產之過出離血盆池地獄獄主乃師官惟有心幸順男女歡
 喜三寶更為阿娘持血盆經三年仍結血盆勝會入于自誦此
 經一萬遍日誦數遍有善男信女過奈河江岸看見血盆池中
 有五色蓮花出現罪人歡喜心生歡悅便得超生佛地諸大菩
 薩及目連尊者放教奉勸南閻浮提諸男信女早竟修行大办
 前拜天敬失手高却難復佛觀女人血盆經若有信心誓焉受
 持誦讀令得三世母親事得生天受諸快樂衣食自然長命富
 貴爾時天龍八部人非人等皆大歡喜信受奉行作礼而退
 佛經受度亡母門 庚 幸男 謹

木版本《佛說大藏血盆經》
 [縦19.2×横18.9cm]

太上血湖救苦拔罪妙經
 爾時 元始天尊在上陽宮內八景天中大會
 說法之時有實相真人越班而出上白天尊言
 昔奉道旨徑往下方廼遊九獄復至上羽天追陽
 縣曠野之中見一硤石在山中內有血池血湖
 血盆血海等諸大地獄各闊四萬八千圍遶其
 地獄中有銅梁銅柱鐵枷鐵鎖鐵網鐵圍萬般
 地獄中有南閻浮提女人無限沙數長枷扭手在
 血湖中受大苦惱獄卒見王一日三度驅勒罪
 人飲食汚血彼時罪人不堪伏喫遂被獄卒拷
 打哀聲號徹萬劫不赦何由出離臣等願乞
 慈悲哀憐研窮詳說 爾時天尊言曰善哉
 善哉實相真人能救此業汝當諦聽時為宣說
 彼時閻浮女人生產之時血露汚觸地神將血
 汚衣服溪河泥濯水流汚漫諸善人取水煎
 茶供養 諸聖致 三元拷較上奏天廷教下
 都加湖受罪從今已往世間孝順男女與母
 齊戒國清安微信心書寫受念持誦即刻玉符
 寶鏡三世父母俱得上生 天堂受諸快樂若
 母親存世能為修持虔脫血湖延生保命衣食
 自然汝宜流傳於世奉勸修持即時存亡開泰
 莫教失乎 爾時實相真人及諸天人皆大歡
 喜信受奉行作禮而退 以今讀下亡過
 母 氏拜受

木版本《太上血湖救苦拔罪妙經》
 [縦18.6×横27.7cm]